
ウォリアーズ

龍二4

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ウォリアーズ

【Nコード】
N4304P

【作者名】
龍二4

【あらすじ】
この世界に 任務を遂行する 団体があつた
その中にある 最も国が直接かわっている団体 国際連合軍
そして最も最大の団体 麒麟
そのほかにもさまざまな団体があつた
その中のウォリアーズの物語です

第1話 入団試験

ここはスーマ王国

この国の中にウォリアーズという任務遂行団体があった
その団体に数多くのランカーがいた
ランカーとは任務遂行する人のことである

「ああーなんかいい仕事ないかな」

と暇そうな30代ぐらいの男が言った

その横にいた20代ぐらいの受付らしい女性がマウスを何回かクリ
ックして男にパソコンを見せて言った

「だったら。これはどうですか？」

そのパソコンに書かれていたのは1万Rロムの報酬がでるAランク級の
任務であった

それをみた男は手を横に何回も小さく往復させていった

「エレンちゃんそれは無理無理。そんな任務にいったら俺死ぬわ」
後ろで聞いていた20代ぐらいの男が笑いながら言った

「アーレムなんか死んでも俺ら大丈夫だぜ」

アーレムは困った顔で言った

「それは冗談で言ってるのか？ダグマル。」

「いや俺はいつでも本気だぜ」

アーレムはますます困った顔でエレンに助けを求めた

「私も大丈夫だと思いますよ」

エレンは真顔で言った

アーレムはいじけた顔になった

エレンとダグマルは笑っていた

その時外から人の足音が聞こえた

入口のほうを見たら10代後半の少年が立っていた
「すみません」

少年は言った

アーレムはすぐに真面目な顔に戻り少年のほうに向かった
アーレムは多分少年は依頼しに来たんだろうと思っていた
だからアーレムは笑顔で言った

「依頼？」

「違います…」

少年の意外な言葉にアーレムはまたいじけた顔に戻った

少年は困った顔でいるとエレンが駆け寄って行った

「この人のことは気にしないで下さい」

「あ、はい」

「あの　ここはウォリアーズであってますよね」

「はい。あってますけど何の御用ですか」

「入団を希望したいんですけど」

「わかりました。入団希望者ですね。私についてきてください」

そういいながらエレンは歩き出した

少年は黙って彼女の後についていく

少し歩くと彼女は止まった

そしてドアにある通信機で誰かを呼び出した

「少々待っててください」

と彼女は少年に向かって言った

彼女は何か思い出した顔で言った

「そういえば…名前言ってなかったわね」

続けて言う

「私の名前はエレン」ヘザー　24歳　任務受付係をやっているわ」

「僕はフォルカー」デラー　16歳　です」

エレンは下のほうをずっと見て言った

「さつきから気になっていたんだけどこの豚みたいななの？」

彼女が見ていたのはフォルカーの足元にいる豚の様態をしていて2

足歩行しているなんとも

かわいらしい豚だった

この豚はずっと歩いていたのだった

「こいつはプギィ 僕にもよくわからない生物です」

「そうなんだ…」

後ろから足音が聞こえた

エレンが席からきいている男の人に言った

「やっと来ましたね」

男は手をそろえて言う

「すまんすまん」

男はフォルターのほうを見た

「君が入団希望者のフォルターくんだね。俺はヴァイル＝ハイン
34歳 この総合高等総司令官

をやっている。よろしく」

ヴァイルは手を差し伸べた

「よろしくお願いします」

フォルターは握手をした

「では、この中に入ろうか」

ヴァイルは部屋の中に入った

フォルターは後ろをついていく

部屋はとても大きくて廊下側はすべてガラス張りで壁はとても厚く
て頑丈そうだった

「では、はじめようかフォルター君」

そっぴいながら背中にしてあつた剣を引き抜いた

「はい！」

フォルターも腰に差してある剣を抜いた

二人の剣はとても細くて鋭かった

「いつでもいいよ」

とヴァイル

ガラス越しに見ているエレンは思った

（どれぐらいの実力かな）

エレンは部屋を見渡した

プギが見渡らないからである
見渡すと隅っこにプギがいた

よく見てみるとお茶を飲んでいる

プギは視線に気づいたのかこっちを向きウインクした

エレンは苦笑いした

（アハハ…）

と思っている間に戦いが始まっていた

あまりの速さに見ているのがやっとだった

（速い…）

再び二人は間を開けて見合っている

「さすが総合最高総司令官ですね。ウォーミングアップも済みまし
たし本気で行きますよ」

（こいつあれでウォーミングアップか…なかなかやるな）

とヴァイルは思った

フォルターの左手から火が出てきた

（あいつ魔法も使うのか！？）

ヴァイルは驚いた顔でずっと見ている

フォルターは左手を前に突き出した

すると火が前にまっすぐ飛び出した

ヴァイルは素早くよけた

（すごい威力だ中級魔法剣士といったところか）

次は左手にはプラズマを帯びていた

そのプラズマはあらゆるところに当たり壁や床などを焦がしている

第1話 入団試験（後書き）

感想などくれたら超うれしいです!!

第2話 合格？不合格？

ウォリアーズ 第2話 合格？不合格？

フォルカー剣を自分の前に横にして左手から出ているプラズマをゆつくりなすりつけた

するとプラズマは剣に乗り移った

（あいつ錬金術魔法も使えるのか！？）

フォルカーはヴァイルに向かって走り出した

そしてフォルカーは何度も切りつけた

だがすべてよけられている

剣からさけているというよりはプラズマをよけているようだった

クウ

フォルカーは素早く後ろに下がり思いっきり剣で空を切った

ライクウハ

「雷空波！！」

すると剣からプラズマを帯びた衝撃波が横に飛んで行った

剣からプラズマがなくなった

衝撃波はヴァイルに向かって飛んでいく

ヴァイルはX型に空を切った

すると剣からX型の衝撃波が出てきた

その衝撃波とプラズマを帯びた衝撃波は激突し大爆発が起きた

その爆風で二人は飛ばされるが剣を地面に差して耐えていた

フォルカーは剣を地面から抜いて構えた

ヴァイルは構えずこういった

「合格だ」

その言葉が聞こえていなかったのかフォルカーは聞き返した
いや聞こえていたが意外な言葉だったので聞き返したのだ

「合格？」

その言葉にヴァイルは強くうなづく

「ああ合格だ」

部屋の隅にいたプギは不思議な足音を立ててフォルカーのほうへ走る
プギはジャンプしてフォルカーの肩の上に乗った

扉が開く音がしたので見てみるとエレンが扉を開けて待っていた

「では手続きをしますのでついてきてください」

フォルカーはエレンの後ろをついていくと最初の場所に戻ってきた
エレンはカウンターの椅子に座りフォルカーはカウンター越しに立
っていた

「では、名前は フォルカー」デラー 16歳 でいいですね」

「はい」

「ではカードを発行いたしますので少々お待ちください」

そうエレンが言うところパソコンのキーボードを打ち始めた

フォルカーの後ろのほうから聞き覚えのある声が聞こえた

後ろを向くと最初にいたいじけた顔の人が立っていた

「合格おめでとう」

「ありがとうございます」

「俺の名は第三特攻部隊所属のアーレム」ウィザードだ。よろしく。

「

そういうとアーレムは手を差し伸べた

「僕の名前は フォルカー」デラー です。こちらこそよろしくお
願います」

フォルカーはそう言いアーレムと握手をした

「はい。これがカードとバッチです」

そっぴいながらエレンはフォルカーに手渡しをした

「ありがとうございます」

カードには第三強行部隊と書かれていた
横から覗き込んでいたアーレムは言った

「強行部隊か…」

意味が分からなかったフォルカーは聞き返した

「強行部隊ってなんですか？」

「強行部隊というのは任務などに行くときの最高前列の言わば攻撃重視の部隊っていうことや」

続いてバッチをよく見ると星が1つあり円を描くように星型の穴が5つ開いていた

「なんですか？この穴は」

「ああこの穴か…この穴は俺らのランクを表すものや。俺の胸についとるやろ」

言われたと通り見ると星が3つ ついていた

「この星は全部で6つあるんや。この星をもらうためには多くの任務を完遂しなきゃいけないんや。部隊は3つあるから第3部隊は1〜3の奴で第2部隊は4〜5で第1部隊は6の奴っていうわけや。」

「わかりました。」

アーレムはフォルカーの耳に口を当てて言った

「噂によれば7つ目もあるという話やで。誰も見たことはないんだけどな。まあお前さんも頑張り」な

と言いながら背中をたたいた

アーレムは違うところへ歩き出した

「このバッチどこにつければいいんですか？」

「どこでもいいですよ」

と言われたのでフォルカーは左肩に付けた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4304p/>

ウォリアーズ

2010年12月18日18時10分発行